

## 本文（平治物語）

（岩波書店『新日本古典文学大系 保元物語 平治物語』による）

さるほどに、海上をへて、尾張國智多郡内海へぞ着給ふ。長田庄司忠致（おさだしやうじただむね）と申は、相傳（さうでん）の家人（けにん）なり、鎌田が為には舅（しうと）、一方ならぬよしみにて、長田が宿所へ入給ふ。さまさまにもてなしまいらせけるほどに、是にて歳ををくり給ふ。やがて出べきよし宣（のたま）へば、長田申けるは、

「三日の御祝過させ給ひてこそ御下（くだり）候はめ。」

と申ければ、さてはとて御とうりうあり。長田が子息先生景致（せんじやうかげむね）をちかくよびて、

「さて此殿をば東國へくだすべきか、是にてうつべきか、いかゞせんずる。」

といへば、景致申けるは、

「東國へ下ておはするとも、よも人下（くだ）しつけ候はじ。人の高名にせんよりも、こゝにてうつて、平家の見参（げんざん）に入、義朝の所領一所ものこさず給か、しからずは當國をなりとも給て候はゞ、子孫繁昌にてこそ候はむずれ。」といひければ、

「さて何としてうつべき。」

「御行水（ぎやうずい）候へとて湯屋へすかし入れて、橘七五郎は美濃・尾張に聞えたる大ぢからなれば、くみてにて候べし。弥七兵衛・濱田三郎はさしてにて候べし。鎌田をばちかくよびよせて、酒をのみて軍（いくさ）のやうをとほせ給はんほどに、頭殿（かうのとの）うたれ給ひぬときゝ、はしりいでんところを、妻戸のかげにて景致まちうけてうちとゞめ候はむ。平賀四郎を亭（でい）にてもてなさむほどに、義朝うたれぬときゝて、おちばおとし候べし。たゝかはばきりとゞめ候べし。玄光法師と金王丸とをば遠侍（とをさぶらひ）にて若者共中にとり籠、引張さしころし候はんずるに何事か候べき。」

とぞ申ける。さてはとて、三日の日湯をわかさせ、長田御前にまいり、

「都の合戦と申、道すがら御くるしき、左こそ御座（おはしまし）候らめ。」

とて、

「御行水候へ。」

と申ければ、

「神妙（しんべう）に申たり。」

とて、やがて湯屋へいり給ふ。鎌田をば長田が前に呼寄て、酒をすゝめ、平賀殿をば亭にてもてなし、玄光を外侍にて酒をすゝむ。橘七五郎・弥七兵衛・濱田三

郎うかゞひたてまつりけれども、金丸太刀帯（はい）て御あかに参りたれば、すべきひまこそなかりけれ。やゝありて、

「御かたびらまいらせよ。人は候はぬか。」

といへば、用意したる事なれば返事もせず。金丸、

「なに人はなきぞ。」

とて、湯殿のほかへ出ければ、三人のものはしりちがひてつといり、義朝の裸にておはしけるを、橘七五郎むずといなく。弥七兵衛・濱田三郎、左右によりて、わきのしたを二刀づゝつく。義朝、

「正清は候はぬか。金丸丸はなきか。義朝たゝ今うたるゝぞ。」

是を最後の御ことばにて、平治二年正月三日御とし卅八にてうせ給ふ。金丸此由をみて、

「にくひ奴原かな。一人も助まじき物を。」

とて、湯殿の口にて三人ながら一所にきりふせたり。鎌田兵衛此由きゝ、

「あな口惜や。頭殿をうちたてまつらん為にてありけるものを。」

とつツとはしり出むとするところを、先生景致つまどのかげにまちうけて、もろひぎきつてきりふせければ、

「正清も御ともに参候。」

と最後のことばにて、頭殿と同年三十八にてうせにけり。平賀四郎義宣（よしのぶ）は是を聞給ひ、弓矢を取て走いでられければ、とゞむるものこそなかりけれ。かやうにさはぎければ、玄光走いで、金丸にいかにといへば、

「頭殿うたれさせ給ひぬ。鎌田もうたれぬ。いかゞせむ。」

といへば、

「いざゝらば長田うたん。」

とて、経居のかたへ走いりたれば、長田はにげてうせにけり。

「さらばうち死せよや。」

とて、うしろあはせになり、さんざんに切てまはりければ、おもてをむくるものもなし。七八人きり臥て、厩へ走いり、馬二疋引いだし、うちのり、

「とゞめよ、者ども、とゞめよ。」

とておちけるが、敵にうしろをみえじとや思ひけん、玄光は逆馬にのつてぞはせたりける。

鎌田が妻女よひよりこのことを聞しかば、人してしらせばやとおもひけれ共、[かたはらに]をしこめられて人一人もつかざりければ、しらするにをよばず。鎌田うたれぬと聞しかば、走いで鎌田が死骸にとりつきていひけるは、

「我をばいかになれとて、すてをきてさきにたち給ふぞ。空しくなるとも同道にこそ契（ちぎり）しか。」

とて、なげきけるが、

「親子なれ共むつまじからず。うき世にあらば、又かゝることをやみむずらん。さらばつれてゆかん。」

とて、鎌田が刀をいまだ人もとらざりければ、刀をとりて、心もとにさしあて、うつぶさまにふしければ、かたなはうしろへわけいでつ。歳廿八にて鎌田が死骸にふしそひて、同じ道にぞなりにける。長田此よしをみて、

「義朝をうつも子どもを世にあらせむが為なり。いかゞせん。」

となげきけれどもかひぞなき。頭殿の御頸（くび）と鎌田が頸をとつてむくろをも一つ穴にほりうづむ。

「世にあらむとおもへばとて、相傳の主と現在の聳をうち、長田庄司忠致は不當（ふたう）なり。」

とぞ人申しける。

異國の安祿山は主君玄宗をかたぶけ、養母楊貴妃をころし、天下をうばひとりしかども、其子安慶緒にころされ、安慶緒は又ちゝをころしたるによつて、史明師にころされて、ほどなく祿山が跡絶ぬ。我朝の義朝は、保元の合戦に、父の首を切（きり）、平治の今は長田がてにかゝつてうたれぬ。忠致相傳の主を討ぬれば、

「行末いかゞあらんずらんとおそろしおそろし。」

とぞ人申ける。